



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-009 号

2018年7月の同志社人



・吉田 曠二氏 (よしだ ひろじ)1963 年同志社大学大学院法学研究科修士課程卒業。

吉田氏は7月9日(月)に第1部門研究(新島研究)の研究会で次のテーマで発表された。

「新島襄の一番弟子、徳富蘇峰と元陸軍中将遠藤三郎 —その戦争日記を読む—」

発表内容はここでは分量も多く、重厚なので安易に記載できない。しかし、そこで使われたパワーポイントに「発表要旨」があるのでそれを転載する。

「満洲事変以来、戦争史の研究は学者によりすぐれた業績が残されている。その中でも、戦争を指導した軍人や宮中関係の歴史資料には、関東軍参謀の石原莞爾と本庄繁日記等があり、太平洋戦争関係では、杉山参謀総長の日記と内大臣の木戸幸一日記も有名である。しかし將軍遠藤三郎日記は、研究者の手でその全貌がまだ明らかにされていない。その理由の一つは遠藤日記が93冊の膨大な分量で、しかも戦後も未整理・未公開になっていたからであろう。しかし遠藤は人間の良心と云う面からみて、満洲事変以来、軍上層部の戦争拡大政策に迎合することなく、リアル・タイムに日記に記録していた。今回はもう一人、人間の良心から見て、あの戦争の発生原因を追跡した歴史家・蘇峰の「終戦日記」も「遠藤日記」と比較しつつ考察してみよう。蘇峰は日清戦争以来、帝国主義の論客として名をあげたが、敗戦後も新島の一番弟子として老いてなお盛んに活躍し、あの戦争を始めた軍人の責任とその病原菌の所在を明らかにしている。」

内容で特筆すべきは、新島襄が明治23年に「20世紀は中国が世界の中心になる」と予言したこ

と。この詳細は内山完造が刊行した著書の中に、魯迅の談話として紹介されているとのこと。

なお、元陸軍中将遠藤三郎の膨大な日記の要点は次の書籍が参考になる。吉田曠二著『元陸軍中将遠藤三郎の肖像―「満洲事変」・上海事変・ノモンハン事件・重慶戦略爆撃』（すずさわ書店 2012）、吉田曠二著『將軍遠藤三郎とアジア太平洋戦争』（ゆまに書房 2015）

ここまで読まれて、「吉田曠二」とは何者？と思われる方もおられるでしょう。

しかし、「同志社タイムス」の読者なら、平成26年5月号から十八回連載していた「新島襄とロビンソン・クルーソー」でお名前はご存じのはずでしょう。

また、ウィキペディアでは、次のような紹介が出ている。

「1963年同志社大学大学院法学研究科修士課程卒業。1964年朝日新聞大阪本社入社。入社後も大学院時代の師田畑忍に師事し、日本近現代史研究を継続。1997年定年退職、名城大学非常勤講師となり外交史、政治史の講義を担当。著書で同志社関係では『新島襄 自由への戦略』新教出版社 1988『わが生涯の新島襄 森中章光先生日記』不二出版 1991 などがある。日中戦争や満洲事変・上海事変・ノモンハン事件など中国での戦争に関する研究が多い。」（引用終わり）

吉田氏の見逃せない論文は、宇都宮徳馬氏が創刊した雑誌「軍縮問題資料」の2006年1月号に掲載されているものである。



それは、2005年7月に北京大学でエドガー・スノウ生誕100周年の国際シンポジウムに参加された報告である。



そのエドガー・スノウは『中国の赤い星』の著者として有名で欧米での中国共産党に対する理解と共感に最も影響を与えた、と言われている。一方、エドガー・スノウと親交が深かった魯迅の「上海魯迅記念館」でもエドガー・スノウ生誕100周年の催しを開催。吉田曠二氏はスノウ研究者として記念館から推薦され、北京と上海の二つのシンポジウムに参加され、報告している。



ここでは報告のタイトルだけご紹介する。

「魯迅の抗日戦争観：中国の奥地に＜敵を懐深く誘い込もう＞

—満州事変から上海事変の時代—」

なお、この評論の中国語訳が収録された専門誌は、紹興文理学院上海魯迅記念館他編「魯迅跨文化対話：紀念魯迅逝世七十周年國際學術討論會文集」：大象出版社2006年10月刊行い

る。

冒頭の同志社で発表された「遠藤三郎日記」について、最近、本格的な研究が他大学と数年計画で進めておられると漏れ伺っている。

本来ならば、同志社の内部から遠藤日記の資料価値が認識され、声が掛ければ一番良かったのですが……。ともあれ成果を期待したい。

追記：原稿を書き終えた後に、7月9日第1部門研究(新島研究)の研究会で吉田曠二氏の講義を聴講した方から情報が届いた。内容は単なる感想ではなく、エッセであり、また、別の角度から吉田曠二氏を語っているので興味深い。

ロシアの文豪 Tolstoy と元将軍遠藤三郎

元クラレ米国社 社長 山中 弘一

私は同志社大学に入学後、ロシア文学の巨匠、トルストイの「戦争と平和」他全作品に傾倒する毎日であった。そんな私が約3年前、母校の同志社の弘風館で毎月、一回、開催される土曜歴史講座で、講師の吉田曠二氏から、初めて、元日本陸軍将軍、遠藤三郎の話を聞かせてもらった。その講演の内容は遠藤の91年間の波乱に富んだ人生のスケッチ・ブックのページを開くような印象をもった。それはニューヨークのビジネス社会で味わったお金一辺倒の体験をした私にとって、若き学生時代に舞い戻るようなひと時でもあった。私にとっては、信じがたい様相を呈している世界で、なんと元エリート将軍であった遠藤が11歳の時から日記を書き、戦時下で命をかけた作戦の合間でさえも毎日、その日の出来事を日記に連続と書き続けていた姿を知り、驚いたからです。それだけではない、遠藤の書き残した膨大な日記は個人日記でありながらも、大日本帝国の運命を定める軍隊組織(参謀本部)で、緻密な作戦計画を立案するなど、戦争時代の国家機密についても、事実を記載した内容で、大日本帝国の歴史を知る第一級の史料であることを講師から聞かされたからである。そのような個人記録を講師の吉田氏はどこから入手されたのか？吉田氏の話では、遠藤日記の現在の著作権者は埼玉県狭山市にある遠藤家にあり、その戸主の御了解を得て、吉田氏が長い年月を費やしてその記載内容を時代背景と重ね合いながら綿密に調査研究してこられたことが分かった。

この種の史料の調査と研究を一人で継続する、そのような作業がなぜ、継続できたのか？

大学を卒業以来、お金万能のビジネス世界に生きて来た私にはそれは想像を絶する努力の積み重ねであったと推測した。しかし同志社の教室を借りて、約3年間も土曜講座の継続ができたのは、陰に埋もれたその研究の蓄積があったからであろう。吉田氏が研究対象に選ばれた元将軍遠藤三郎日記は、すでに二冊の伝記文学として出版されていて、来年からは、その戦争期の日記が逐次、毎年一冊の計画で出版される計画になっている、と聞かされた。日記を書き残した遠藤三郎は東北の米沢藩の生まれで、明治維新前の戊辰戦争では、討幕軍

に味方せず、中立を守り、内戦には巻き込まれていない。そのような米沢藩の土壤が、長じて陸軍内で頭角をあらわす、軍人遠藤三郎の戦争嫌いの性格を形成したものか？私はあの陰謀家たちが屯し、それ行けやれ行けの勇ましい進軍ラッパを吹き鳴らす将軍が闊歩する日本陸軍の中で、遠藤が一人孤立しながらも、冷静な頭脳から、行動した人物でありえた、その理由を探し求めながら、時間の過ぎる速さを実感した。

さらに圧巻だったのは、今年の7月9日に、同志社の本部が主催する定例の新島研究会で吉田氏の遠藤三郎研究の一つの総括ともいべき講話を映像も交えて拝聴したことであった。私はその教室で配布された資料からも改めて将軍遠藤三郎の人間としての凄さに強く感銘を受けた。その主たる理由は、1、元来、遠藤は深い人間愛を内蔵した人物であったこと、2、新島流の良心を軍隊に持ち込み、中国大陸で戦う全軍の兵士に「従軍兵士の心得」と題する小冊子を配布していたこと、さらに3、敗戦後は、新島襄にも相通じる非戦平和論を具体的な平和運動として、開拓農民の立場から、遠藤が実践した姿であった。私はこの姿はまさしく、ロシアの文豪、トルストイの魂とも酷似しているものと、印象を持ったのです。当時の欧米諸国の軍隊と異なり、とかく日本軍は部下将兵の生命を紙屑のように考え、また自国民をすら、見殺しにする集団であったこと。それに反して、遠藤三郎は自分が属していた軍隊そのものの価値を否定した稀有な人物であったことです。よくもまあ、彼が最終段階で暗殺されずに生き延びたことと思います。戦後は農民として、軍備不要論から更に軍事亡国論へと彼はその思想を発展的に進化させていったのです。

私は惜むらくは、遠藤の寿命がもう少し残されていたら、彼を理解し支える人間が遠藤の偉大さを理解し、教育の面と政治の場でアピールできていたら、と残念に思います。

彼は戦後、五回も新中国に招かれ毛沢東主席や周恩来首相と友好親善外交を展開するなど、その詳しい活動については、吉田氏がその二冊の著作で明らかにしています。

私は神様とは無慈悲なものだ、と思いたい。遠藤はこの世に沢山やり残した課題があって、此の世を去るのは、さぞかし悔しかったにちがいない。

それにしても吉田曠二氏の獅子奮迅の努力があったればこそ、私どもがこのような珠玉のごとき人物の講話を拝聴できたと思います。

トルストイ的人物にどこまでも迫る吉田氏の姿に脱帽です。願わくば、新島襄が生み出した同志社の中に、もっともっと勇気をもって行動できる平和主義者が生まれ出ることを祈ります。智識教育一辺倒では、限界がある。同志社の戦後教育には、新島流の平和教育の種まきが忘れられていたのではないのでしょうか？遠藤の戦後日記には、「トルストイ著『剣もて亡ぶ』予が終戦時、叫ビシ所誤リナキヲ知り嬉シ」と記載されています。この言葉から私は

遠藤三郎が Tolstoy ファンであったことを知り、良き時代の DOSHISHA で、学んだ自分を懐かしく思い出しました。

願わくば Tolstoy を愛した元将軍の書き残した「遠藤三郎日記」を同志社 150 年企画の中に加えられることを願います。現在の同志社の建物をみて、お金がないとは言えないはず

です。そのお金を何に使うのか？目的を定めて決定する勇気があるのか？ないのか？の問題でしょう。その答えを見たいです。 以上

.....

吉田曠二氏から学ぶこと

京都大学名誉教授 竹内 賢一

思い返せば吉田さんと私は70年来の友人である。しかし、小中学生のころはクラスが別々で、境遇も異なっていたために、お互いによく知り合う時間がなかったように思う。その後吉田さんは同志社高校、同志社大学法学部、私は京都府立桃山高校、京都大学工学部へとそれぞれ文系、理系に分かれて学生時代を過ごした。兩人とも大学院修士課程を経て、民間で社会人としての一歩を踏み出した点で似通っている。吉田さんは朝日新聞社を定年まで勤めあげられたが、私は石油化学会社を中途退職して母校に戻り教育研究の道を歩んだ。吉田さんは今や押しも押されぬ近代史研究の第一人者であるが、この道に本格的に入られたのは50歳を越えてからというから驚きである。

私が吉田さんの歴史研究に傾倒したのは、2012年に上梓された「八重・襄・覚馬 —三人の出会い—」を拝読してからである。曾祖母が会津出身であることから、大変興味深く拝読したが、驚いたことは吉田さんの非常に研究的な態度であった。ちょうどNHKで大河ドラマ「八重の桜」が放映される直前であり、多くの「八重もの」が書店に並んだが、その切口の斬新さと史実に対する誠、客観性という点で抜きんできていたと確信している。

先日、吉田さんの誘いで同志社新島襄研究会での同氏の発表を拝聴する機会を得た。その講演と配布資料に同氏が戦争史に引き込まれた経緯が述べられていたが、同氏の学問に対する真摯な態度と平和を愛する姿勢が、新島襄の教えによるものであり、また、直接指導を受けた恩師の教えでもあることが強く感じられた。

吉田さんの真骨頂は、何といっても後の反戦平和主義者、遠藤三郎元陸軍中將が残された93冊の日記を丹念に読み解き、大部4冊の書籍として世に紹介されたことであろう。必ずしも名前の通っていなかった一軍人の生きざまと思想に着目し、埼玉県狭山市の遠藤家ご遺族宅で、達筆で書かれた日記を熟読、丹念に筆写、複写を繰り返して上梓に漕ぎ着けられたのは並大抵の努力ではなかったであろうと想像する。さらに、中国からの留学生張鴻鵬氏を指導し、遠藤三郎の思想を中心とした内容で博士号(名城大学)の取得に至らせるなど、在野の研究者が容易にできることではない。

平成 27(2015)年に吉田さんの指導で「昭和史スタディー・サロン」がスタートし、ほぼ毎月同好の士約 20 名が同志社大学の校舎で満州事変、日中戦争、太平洋戦争に関する吉田さんの講義を受けてきた。私は社会科学の研究がどのような手法で進められるのか、大変興味を持っていたが、同氏が中国の主要な地を実際に訪問し、日中戦争を実地に見聞して歩かれたことを知り、衝撃に近い印象を受けた。また、太平洋戦争を主導した軍部の拙劣な戦略と人間性の欠如を正面から批判する同氏の姿勢には、真の勇氣と理性が感じられる。この研究会は途中で「吉田近代史研究会」と名称を変えて今も続いているが、吉田さんが講演・著述で多忙のため最近は年一度同志社びわこリトリートセンターに集い、素晴らしい施設で最近の勉強の成果を発表し合い討論を楽しんでいる。この会で吉田さんの最近の研究成果を拝聴するのが楽しみである。■